

The Disinhibition by Power and "Kantian Imperative" : The Effect of Power Priming on Interventional Decision in the Loop Dilemma Situation and Altruistic Morality

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 智博 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5792

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



権力による脱抑制と「カント哲学の義務論」:

権力プライミングがループジレンマ状況への
介入決定および愛他的道徳性に与える効果

熊谷智博

要 約

ループジレンマと線路ジレンマという2つの道徳ジレンマを用いて、(1)介入抑止がカント哲学の義務論によって生じること、(2)権力プライミングによる脱抑制が介入行動に対する合理的意思決定を促進すること、(3)道徳ジレンマへの介入の際の責任感と自己犠牲的態度は権力プライミングによって強まることを検討した。参加者は権力に関連した単語の探索課題と自分が権力を持っていた時の経験について回答した。次に線路ジレンマ状況、ループジレンマ状況のいずれかを読み、少数を犠牲にして多数を助けるという介入行動についての質問に回答した。結果は、ループジレンマにおいてより強い介入抑止が見られ、またループジレンマにおいてのみ権力プライミングによって介入を選択する人の人数が増えた。更に権力プライミングは致命的状況に対する責任感と自己犠牲的態度を強めることが示された。権力意識による脱抑制の適応の効果の可能性について議論された。

キーワード：道徳ジレンマ、権力、介入抑止、脱抑制、カント哲学の義務論

問 題

5人の命が危機にさらされているが、1人を犠牲にすれば5人が助かるという状況に介入できるとしたら、大多数の人は介入することを適切と考える(Hauser, 2006)。しかし時にはそのような介入をすることに人々は強い躊躇を感じることもあり、これは介入抑止(Intervention inertia)と呼ばれる(Van den Bos, Müller, Beudeker, Cramwinckel, Kumagai, Ruben, Smulders, & Van den Laan, 2013)。この介入抑止が生じるのは人々が道徳ジレンマに直面するときである。道徳ジレンマとはそれぞれに好ましい理由のある行動のいずれかを選択しなくてはならない状況のことである(Greene, Sommerville, Nystrom, Darley, & Cohen, 2001)。そのような状況での行動には道徳性に基づく抑制が働く。よく知られているのは陸橋ジレンマと呼ばれるもので(Greene, 2008; Greene, et al., 2001; Hauser, 2006)、それは次のような状況である。「線路上には暴走した列車が走っており、その先には5人の人が逃げ遅れている。このままではその5人は確実に轢かれて死んでしまう。あなたはその線路の上に架かっている橋にいて、あなたの隣には体の大きな男が1人いる。轢かれそうな5人を助ける唯一の方法は、あなたの隣の大男を橋の上から突き落として列車に轢かせる事である。そうすればその衝撃で列車は止まり、線路上の5人は助かる。しかし当然ながら突き落とされた大男は死んでしまう。このようなときあなたならどうするだろうか?」という質問である。Hauser(2006)によれば回答者のうち約10%だけが大男を突き起こすことは許されると答えた。

もう1つの一般的な道徳ジレンマは線路ジレンマである (Thomson, 1976, 1986)。陸橋ジレンマと同様、「5人が暴走列車に轢かれそうになっている。彼らを助ける唯一の方法は、あなたの手元にある線路の切り替えスイッチを入れることである。そうすれば列車は脇の線路に進み5人は助かる。しかし切り替えた先の線路上にも人が1人いて、その人は轢かれて死んでしまう。このような状況であなたならスイッチを入れるだろうか？」という質問である。Hauser (2006)によれば、回答者の90%がスイッチを入れることは許されると答えた。

このように陸橋ジレンマでは介入抑止が強く生じ、線路ジレンマであまりは生じない点については様々な見解があるが (Greene, 2008; Greene et al., 2001), Hauser (2006)によれば「他人を目的のための単なる手段として用いることは許されないというカント哲学の義務論 (pp.116)」を人々は備えており、それが介入に対する決断を左右するためである。すなわち線路ジレンマ状況では線路を切り替えることによって「たまたま不幸にも」線路上にいた1人を犠牲にしてしまうので、その1人の犠牲者を利用した訳では無い。これに対して陸橋ジレンマでは大男の身体と生命を、5人を救うための手段として利用していることが明確である。従って「カント哲学の義務論」は陸橋ジレンマでより強く働き、そのため介入抑止も強くなる。

このように陸橋ジレンマは確かに介入抑制を強く生じさせる良い例であるが、それが「他人を目的のための単なる手段としてはならない」というカント哲学の義務論の影響を検討する際には、それを線路ジレンマと比較することはあまり適切では無い。なぜなら両ジレンマ状況には他人を手段として用いる点以外にも、被害者を突き落とすといった被害に直接的に関与するか、レバー操作という間接的に関与するかという心理的に重要な影響を与える点が異なる。そのためカント哲学の義務論によって介入抑止が生じていることを明らかにするには、介入方法を同一にして検討する必要がある。そこで本研究では陸橋ジレンマの代わりにループジレンマを用いた。

ループジレンマ (Hauser, 2006ではNedのジレンマと呼ばれている)とは以下の状況である。「暴走した列車の先にはこのままでは轢かれて死んでしまう5人の作業員がいる。彼らを救うためにはあなたの手元にあるスイッチを入れる必要がある。そうすれば列車は一旦隣の線路に進む。その隣の線路は最終的には元の線路に戻り、このままでは結局5人は轢かれてしまう。しかし隣の線路には1人の大男がいるので、彼に列車が衝突して止まるだろう。当然列車に轢かれた1人の男は死んでしまう。このような状況であなたはスイッチを入れるだろうか?」。Hauser (2006)によれば回答者の約50%がスイッチを入れることは許されると回答した。線路ジレンマもループジレンマも全く同一の行動(スイッチを入れる)を尋ねているにもかかわらず、Hauser (2006)は陸橋ジレンマよりは弱いとはいえ、ループジレンマでも強い介入抑止が生じることを示唆している。しかしHauser (2006)では介入の適切さに関する判断を尋ねているが、実際に自分がその状況にいるとしたらどうするかという行動決定については検討していない。そこで本研究では第1にこのループジレンマを用いて、介入の行動決定をカント哲学の義務論が抑止する点を検討する。これまでの議論に基づき、以下の仮説が設けられた。

カント哲学の義務論によって介入抑止が生じるのであれば、それが生じるループジレンマの方が、線路ジレンマよりも介入を選択する回答者の割合が低くなるだろう (仮説1)。

権力と介入抑止

介入抑止に関しては、それが文化や教育歴などに影響されないが (Hauser, 2006)、一時的な心理状態によって影響を受けることが報告されている。例えばVan den Bos et al., (2013)は脱抑制 (disinhibition) が道徳ジレンマでの介入抑止を弱めることを報告している。Van den Bos et

al., (2013) によれば脱抑制とは自分たちの行動を他人がどのように考えるかについて、人々が気にしなくなることと定義される。脱抑制が人々に与える影響について先行研究では反社会的な行動が増加するという否定的な側面が報告されている一方で (Keltner, Gruenfeld, & Anderson, 2003), 脱抑制された参加者は脱抑制されなかった参加者よりも違法ではないが非倫理的な方法で手に入れた報酬に対して、満足度が低くなるという向社会的な影響も報告されている (Van den Bos et al., 2013, experiment 6)。これらの結果から、脱抑制は向社会的であれ反社会的であれ、その時に人々が望んでいることを自由に行う事を促進すると本研究では仮定した。

脱抑制を生じさせる要因としては権力が挙げられる (Van den Bos et al., 2013)。例えば Sachdev & Bourhis (1987, 1991) は、権力を持つ集団は公正規範を無視する傾向があることを報告している。これは権力を持つものは他人が自分をどのように考えるかについて配慮しなくなる、すなわち脱抑制が生じたためであると考えられる。この権力による脱抑制はカント哲学の義務論から生じる介入抑止を弱めると推測できる。Van den Bos et al., (2013, experiment 3) の研究では権力のプライミングによって人々が陸橋ジレンマへの介入態度が強まる事が報告されている。しかし Hauser (2006) の道徳ジレンマの研究と同様、それが単に態度に留まらず介入行動を促進させるか否かについてはこれまで検討されていなかった。そこで介入行動の決定に対する権力の影響について検討するのが本研究の第2の目的である。権力が脱抑制を強め、それが介入抑止を弱めるといふ心理過程を検討するために以下の仮説が設けられた。

ループジレンマにおいて権力をプライミングされた参加者は、プライミングされなかった参加者よりも、ジレンマ状況に介入して5人を助ける選択を選ぶ割合が高くなるだろう (仮説2)。

愛他的道徳性

本研究の第3の目的は、道徳ジレンマにおける愛他的道徳性の心理について、権力プライミングの脱抑制効果を用いて検討することである。先行研究で示されたように、介入抑止が生じる陸橋ジレンマに比べ、それが生じない線路ジレンマにおいて介入態度が権力プライミングによって促進されたことから (Van den Bos et al, 2013), 自由に行動できるときにはなるべく多くの人々を救いたいと考える愛他的道徳性が人々の心理過程には存在すると推測される。愛他的行動に関する先行研究は、それが他者からの評判を得ることに動機付けられているという見解がある一方 (Fehr, 2004), そのような評判を心配する必要の無い状況においても互惠性認知に基づく愛他的行動が見られることも報告されている (Gintis, Bowles, Boyd, & Fehr, 2003)。従って互惠性に基づいているとはいえ、人々には他人を助けたいという愛他的道徳性が備わっていると考えられる。もしこのような愛他的道徳性が存在するのであれば、それは愛他的行動に対する責任感を生むと推測される。そして責任感はその他の要因によって抑制されていないと人々が認知しているときほど強いものとなるだろう。従ってもし権力プライミングによって脱抑制が強まっているのなら、致命的状況に対して介入することへの責任感が強まると過程した。

また愛他的道徳性が本当に愛他的な心理に基づくものであれば、自分にとって損となり、また自分の行動によって後に自分が利益を得る事が出来ないような方法でも愛他的行動を実行したいと考えるだろう。そのような方法の極端なものは自己犠牲である。もし全くの愛他的道徳性によって致命的状況への介入が動機付けられているのであれば、自分を犠牲にしても多くの人を助けたいという自己犠牲的な態度を人々は持っており、しかもそれは権力プライミングによる脱抑制状態で強くなると予測される。以上の議論に基づき、愛他的道徳性に関して以下の仮説を設けた。

権力をプライミングされた参加者は、脱抑制によって愛他的道徳性が解放されるので、5人を助

けるための介入行動への責任感を強く抱き（仮説3）、また自分を犠牲にしても5人を助けたいという態度を強めるだろう（仮説4）。

方 法

参加者と実験デザイン

東北地方の大学生と専門学校生240名（男性123名、女性117名）が質問紙に回答した。回答者は権力要因2水準（権力プライミング vs. 統制）と道徳ジレンマのタイプ要因2水準（線路ジレンマ vs. ループジレンマ）の被験者間要因配置の4条件のうち、いずれか1つの条件の質問紙をランダムに配布された。

手 続 き

回答者には質問紙を使って一度に2つの調査を行うと説明した。最初の調査は単語探索課題で15マス×15マスに並んだ平仮名のマトリックスの中から、指定された単語を見つけ出すことであった。権力プライミング条件では、回答者は権力に関連した6つの単語（例えば「けんりょく」（権力））を見つけ出すように求められた。統制条件では6つの単語は権力とは無関係の単語（例えば「りんご」）を見つけ出すように求められた。

単語探索課題に続いて権力プライミング条件の参加者は、自分が権力を持っていて、他人の行動を決定できた時の経験を思い出し、その時にどのようなことを考えたか、どのように感じたか、そしてどのように振舞ったかを記述した。統制条件では動物園や遊園地に行った経験を思い出し、そのときの考えや気持ち、行動を記述した。

次に第2の調査として参加者は道徳ジレンマに関する質問に回答した。半数の参加者は線路ジレンマの状況の説明文と一緒にその状況の絵を呈示された。残りの半数はループジレンマの説明文とその絵であった。線路ジレンマとループジレンマの状況説明はそれぞれ以下のとおりである。

線路ジレンマ：あなたが以下の状況にいるところを想像してください。あなたは線路切り替え機のそばに立っています。すると突如後ろから列車が暴走して来ました。このまま列車が進む先の線路では、5人の作業員がおり、このままでは彼らが逃げるのに間に合いません。列車がこのまま進めば5人全員が死んでしまいます。5人を助けるための唯一の方法は、あなたのそばのレバーを倒し、線路を切り替えることです。そうすれば列車は別の線路へと進んで行きます。しかしそちらの線路に列車が進むと、作業員が1人、轢かれてしまいます。その1人はそれによって確実に死んでしまいます。

ループジレンマ：あなたが以下の状況にいるところを想像してください。あなたが線路の近くを歩いていると、突如後ろから列車が暴走して来ました。よく見るとその列車が進む先の線路には、5人の作業員がいます。列車がこのまま進めば5人全員が死んでしまいます。運よく列車の線路の切り替え器がすぐ近くにあることにあなたは気がつきました。切り替え器のレバーを倒せば列車は隣の線路に進みますが、結局は元の線路に戻って5人を轢き殺してしまうようになっています。しかし切り替えた先の線路上には体の大きな男がいます。その男を列車に轢かせれば、その重さで列車は減速し、5人の作業員はその間に脱出することが出来るでしょう。5人の作業員を助けるための唯一の方法は、あなたのそばのレバーを倒し、線路を切り替えることです。そうすれば列車は別の線路へと進んで行きます。しかしそちらの線路に列車が進むと、

1人の大男が轢かれて確実に死んでしまいます。

参加者はシナリオの状況に介入して1人を犠牲にし、5人を助けるか否かについて「はい」「いいえ」の2件法で回答を求められた。ここまでの手続きはVan den Bos et al., (2013, experiment 3)と同じだが、陸橋ジレンマが無く、その代わりにループジレンマが用いられていた。

続いて抑制感に関する質問として「あなたは5人を助けるかどうか、どれくらい迷いを感じましたか?」、責任感に関する質問として「何を犠牲にしても、線路上の5人を助けなくてはいけなかった」、そして自己犠牲的態度に関する質問として「私は別の線路の1人の命よりも、むしろ自分の命を犠牲にするだろう」という項目に、7件法(1=「全くそう思わない」、7=「非常に強く思う」)で回答した。

結 果

介入の決定

権力プライミングが介入行動の決定に与えた効果を検討するために、ロジスティック回帰分析を行った。道徳的ジレンマ状況への介入に「はい」と回答した者に1を、「いいえ」と回答した者に0を割り当て目的変数とした。説明変数には権力要因(1=権力プライミング条件, 0=統制条件)と道徳ジレンマのタイプ要因(1=線路ジレンマ条件, 0=ループジレンマ条件)を用いた。結果は権力要因と道徳ジレンマのタイプ要因の交互作用が有意であった(オムニバス検定の $\chi^2 = 34.47$, $p < .01$, $-2 \log \lambda = 291.83$, 回帰係数 $= -1.49$, $p < .01$, $\text{Exp}(B) = 0.22$)。図1に示されているように、ループジレンマにおいて権力要因は介入の決定を有意に予測しており、権力プライミング条件では統制条件よりも介入を選択した人が多かった($\chi^2(1, N = 120) = 7.06$, $p < .05$)。線路ジレンマではそのような有意差は無かった($\chi^2(1, N = 120) = 0.68$, $p < .45$)。また権力要因(オムニバス検定の $\chi^2 = 34.47$, $p < .01$, $-2 \log \lambda = 291.83$, 回帰係数 $= 1.13$, $p < .01$, $\text{Exp}(B) = 3.10$)、道徳ジレンマのタイプ要因(オムニバス検定の $\chi^2 = 34.47$, $p < .01$, $-2 \log \lambda = 291.83$, 回帰係数 $= 2.30$, $p < .01$, $\text{Exp}(B) = 9.99$)は共に、介入の決定を予測していた。権力プライミング条件(49%, $N = 59$)は統制条件(42%, $N = 50$)よりも多くの回答者が介入を選択した。また線路ジレンマ条件(63%, $N = 76$)はループジレンマ条件(28%, $N = 33$)よりも多くの回答者が介入を選択した。

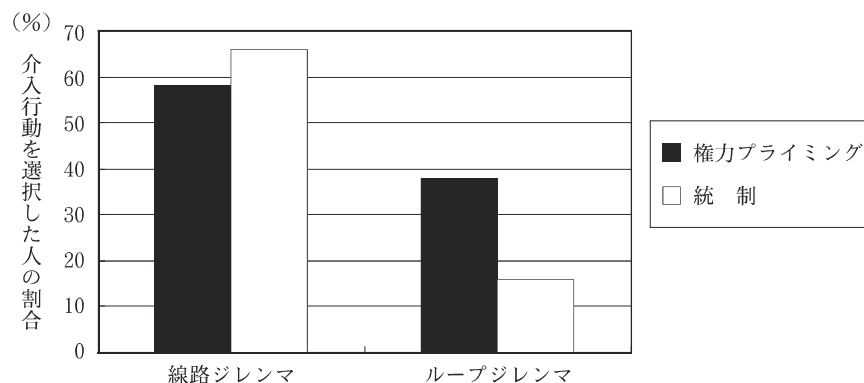


図1 各条件での介入を選択した回答者の割合

抑制感、責任感、自己犠牲的態度

介入に対する抑制感、責任感、そして自己犠牲的態度に関する質問項目の得点に対して、権力プライミング要因とジレンマのタイプ要因による分散分析を行った。その結果、抑制感に関して権力要因の主効果が有意傾向であった ($F(1, 236) = 3.81, p < .10$)。権力プライミング条件の参加者 ($M = 5.26, SD = 2.08$) は統制条件の参加者 ($M = 5.73, SD = 1.59$) よりも、道徳ジレンマ状況に対して抑制を弱く感じる傾向があった。道徳ジレンマのタイプ要因の主効果、及び権力要因と道徳ジレンマのタイプ要因の交互作用による抑制感への有意な効果は無かった。

責任感に関しては権力要因の主効果による有意な差が見られた ($F(1, 236) = 5.61, p < .05$)。権力プライミング条件の参加者 ($M = 3.57, SD = 1.68$) は、統制条件の参加者 ($M = 3.06, SD = 1.66$) よりも、介入に対する責任を強く感じていた。道徳ジレンマのタイプ要因の主効果は有意傾向であった ($F(1, 236) = 3.62, p < .10$)。線路ジレンマ条件の参加者 ($M = 3.52, SD = 1.70$) はループジレンマ条件の参加者 ($M = 3.11, SD = 1.65$) よりも介入の責任を強く感じる傾向があった。権力要因と道徳ジレンマのタイプ要因の交互作用による責任感への有意な差は無かった。

自己犠牲的態度に関しては権力要因の主効果による有意な差が見られた ($F(1, 236) = 8.76, p < .01$)。権力プライミング条件の参加者 ($M = 3.45, SD = 2.05$) は統制条件の参加者 ($M = 2.73, SD = 1.74$) よりも、自分を犠牲にしても線路上の5人を助けたいと強く考えていた。道徳ジレンマのタイプ要因の主効果、及び権力要因とジレンマのタイプ要因の交互作用による自己犠牲への有意な差は無かった。

考 察

本研究の目的は大きく分けて3点あった。第1点は道徳ジレンマで生じる介入抑止がカント哲学の義務論に基づくことを検討すること、第2点は権力プライミングによって人々には脱抑制が生じ、道徳ジレンマ状況への介入が強まる点を検討すること、そして第3点は介入行動の背後にある愛他的道徳性について検討することであった。

第1の点に関して、本研究では仮説1としてカント哲学の義務論が生じるループジレンマの方が、それが生じない線路ジレンマよりも介入が抑制されると予測した。結果は、統制群においてループジレンマの参加者の方が線路ジレンマの参加者よりも1人を犠牲にして5人を助けるという行動を選択する者が少なかった。従って仮説1は支持された。道徳ジレンマで生じる介入抑止は、陸橋ジレンマで見られたような直接手を下すか否かという点によりも、他人の生命と肉体を、目的のための手段として用いてはならないというカント哲学の義務論を人々が備えており、それが合理的には正しいと思える判断を抑制するように働いているということが本研究の結果から明らかになった。更にこの結果は Hauser (2006) の介入に対する態度の結果と一致しており、ループジレンマが強い介入抑止を生じさせる道徳ジレンマ状況であることが態度の点だけではなく、行動決定の点からも確認できたといえる

本研究の目的の第2点は、カント哲学の義務論が強く働くループジレンマ状況であっても、権力をプライミングされた参加者は5人を助けるために状況に介入し1人を犠牲にする選択をとるようになるという予測の検討であった。結果はループジレンマに対しては、権力をプライミングされた参加者は、そのような操作を行わなかった参加者に比べて介入を選択する回答が多くなっていた。しかし線路ジレンマでは権力プライミングのその様な効果は無かった。また権力プライミングによ

る脱抑制の効果についても統計的には有意傾向に留まったが、脱抑制が生じている可能性が示された。これらの結果は、権力プライミングによって参加者に脱抑制が生じ、それによってループジレンマで生じる義務論による行動決定への抑止効果が弱まった結果、人々は状況に介入して1人を犠牲にして5人を助けるという決定をしやすくなったと解釈できる。従って仮説2は支持されたといえる。道徳ジレンマに対する人々の反応は文化や年齢、教育水準 (Hauser, 2006)、更には宗教に対する信仰心等 (Dawkins, 2006 垂水 2007) の影響を受けない事が報告されている。加えて Kohlberg (1987 岩佐 1987) が指摘するように道徳性は発達と共に獲得されるので、安定的で強固な認知・思考スタイルであると考えられている。しかし本研究で示されたように一時的な権力概念の喚起によってそれが変化することから、実際には道徳的判断は状況によって変化する柔軟性も備えているのかもしれない。ただし権力プライミングによって確かにループジレンマに介入するという回答は増えたが、それでも線路ジレンマで介入を選択した数には及ばないことも本研究では示されている。これは脱抑制が生じたとしても、カント哲学の義務論の影響は依然として強く働いている可能性を示している。本研究では権力プライミングによる脱抑制の効果が弱かったという問題も残ってしまったので、将来的にはこの点を改良し、カント哲学の義務論の影響の強さについて再検討する必要があるだろう。

そして第3の愛他的道徳性の存在に関して、権力プライミングによって参加者は道徳ジレンマに介入することへの責任感を強めていた。従って仮説3は支持された。権力プライミングによって人々の脱抑制が強まるので、その状態で多くの人を助けることへの責任感が強まったということは、本研究で推測されたように人々は自由に振舞える状況では多くの人々を救わなくてはならないと考える愛他的道徳性をもっており、それが脱抑制によって強まった結果と解釈できるだろう。

更には自分を犠牲にしてでも多くの人を助けたいという全くの愛他的態度に関しても、権力をプライミングされた参加者は、統制群の参加者よりもそれが強まっていた。従って仮説4も支持されたといえる。脱抑制状態の心理 (Keltner, et al, 2003) や匿名性が人々の行動に与える効果 (Diener, Fraser, Beaman, & Kelem, 1976) についての多くの研究は、人々が可能であれば利己的に振舞い、時には反社会的な行動が促進されることを報告している。更には一見愛他的な行動であってもそれは他人からの評価を得ることに動機付けられていたり (Fehr, 2004)、自己と他者を同一視しているときにのみ生じることも指摘されている (Cialdini, Brown, Lewis, Luce & Neuberg, 1997)。これらに対して本研究の結果は、利己的な関心から解放された状態においてもなお愛他的に振舞おうとする人々の心理過程の存在を示唆している。従って本研究の結果は人々の本性が必ずしも貪欲な利己主義者ではなく、むしろ可能であれば他人を助け、貢献したいと常々考えている愛他主義者という、単なる理想的な人間像と考えられていた本性を実は人々が備えている可能性を示すものであるといえるだろう。

今後の展望

本研究で見られた権力プライミングによる脱抑制は、単に個人的な意思決定の場合だけではなく、集団間関係にも当てはまることが考えられる。集団では人々は集団間の評価と集団内での尊重を求める (Tyler, Degoe, & Smith, 1996)。このことを過度に意識することで、人々は集団間交渉において合理的で両集団にとって最も望ましい決定を下すことを困難にしているかもしれない (例えば Brewer, 1979; Tajfel, 1970; Turner, 1975)。しかし集団のリーダーが権力によって脱抑制されていれば、リーダーは内集団成員による評価から自由でいられるので、リーダーは集団間での交渉において合理的で自集団にとって最も望ましい選択をしやすくなることが考えられる。このように、権

力と脱抑制の関係は集団間関係研究においても重要で検討すべき問題であるといえるだろう。

そして最後に、権力による脱抑制は社会環境における生態学的適応性を高めてきた可能性も考えられる。マキャベリが『君主論』(1513 佐々木訳 2004)において主張したようにリーダーのような高地位の者は企業でのリストラクチャリングなど、集団全体の利益と維持、発展のために時には少数の集団成員を犠牲にしても多数の集団成員を助けるという功利主義的決断が求められることがある。しかしその決断は内集団成員を大事にするという道徳性との間にジレンマを生むので、リーダーにとっては辛い選択となる。権力による脱抑制はそのような難しい選択をする際の否定的感情を弱める効果があり、それがリーダーの精神状態にとって有益に働いているのではないだろうか。そしてこのような利点から、権力による脱抑制は進化による社会性の発達と共に我々が既に獲得している、生得的な心理システムである可能性も考えられる。つまりマキャベリが説く以前から、我々の心にはマキャベリの主張を学んでいたのかもしれない。もちろんこの点については本研究では検討できないので、神経科学的アプローチなどからも脱抑制効果の自動性などを検討し、その存在を明らかにしていくことが今後の課題である。

謝 辞

本研究は、平成 19 年度文部科学省科学研究費補助金 (若手研究(B)を受けて行われたものである。

本研究の実施にあたって Utrecht 大学 Kees van den Bos 教授より多くの情報を提供していただきました。また調査の実施にあたっては東北大学文学部の吉田早也香さん、吉田真理子さんにご協力いただきました。記してお礼を申し上げます。

引用文献

- Brewer, M. B. (1979). In-group bias in the minimal intergroup situation: a cognitive-motivational analysis. *Psychological Bulletin*, 86, 307-324.
- Cialdini, R. B., Brown, S. L., Lewis, B. P., Luce, C., & Neuberg, S. L. (1997). Reinterpreting the empathy-altruism relationship: When one into one equal oneness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 481-494.
- Dawkins, R. (2006). *The god delusion*. Boston, MA: Houghton Mifflin. (垂水雄二 (訳) (2007). 神は妄想である — 宗教との決別 早川書房)
- Diener, E., Fraser, S. C., Beaman, A. L., & Kelem, R. T. (1976). Effects of deindividuation variables on stealing by Halloween trick-or-treaters. *Journal of Personality & Social Psychology*, 33, 178-183.
- Fehr, E. (2004). Don't loss your reputation. *Nature*, 432, 449-450.
- Gintis, H., Bowles, S., Boyd, R., & Fehr, E. (2003). Explaining altruistic behavior in humans. *Evolution and Human Behavior*, 24, 153-172.
- Greene, J. D. (2008). The secret joke of Kant's soul. In W. Sinnott-Armstrong (Ed.), *Moral Psychology, 3, The Neuroscience of morality: Emotion, brain disorders, and development*. Cambridge, MA; The MIT press.
- Greene, J. D., Sommerville, B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2001). An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment. *Science*, 293, 2105-2108.
- Hauser, M. (2006). *Moral minds: How nature designed our universal sense of right and wrong*. New York: Ecco.
- Machiavelli, N. (1513). *Il Principe*. (佐々木毅 (訳) (2004) 君主論 講談社)
- Keltner, D., Gruenfeld, D. H., & Anderson, C. (2003). Power, approach, and inhibition. *Psychological Review*, 110, 265-284.
- Kohlberg, L. (1987). *Moral stages & moral education*. (岩佐信道 (訳) 道徳性の発達と道徳教育 コール

バーグ理論の展開と実践 麗澤大学出版会)

- Sachdev, I., & Bourhis, R. Y. (1987). Status differentials and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 17, 277-293.
- Sachdev, I., & Bourhis, R. Y. (1991). Power and status differentials in minority and majority group relations. *European Journal of Social Psychology*, 21, 1-24.
- Tajfel, H. (1970). Experiments in intergroup discrimination. *Scientific American*, 223, 96-102.
- Thomson, J. J. (1976). Killing, letting die, and the trolley problem. *The Monist*, 59, 204-217.
- Thomson, J. J. (1986). *Rights, restitution and risk*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Turner, J. C. (1975). Social comparison and social identity: Some prospects for intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 5, 5-34.
- Tyler, T. R., Degoey, P., & Smith, H. (1996). Understanding why the justice of group procedures matters: A test of the psychological dynamics of the group-value model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 913-930.
- Van den Bos, K., Müller, P. A., Beudeker, D. A., Cramwinckel, F. M., Kumagai, T., Ruben, S., Smulders, L., & Van der Laan, J. (2013). Morality and overcoming intervention inertia: Disinhibited behavior can improve the greater good. *Manuscript under submission*.

The disinhibition by power and “Kantian imperative”:

The effect of power priming on interventional decision
in the loop dilemma situation and altruistic morality.

Tomohiro Kumagai

Abstract

By using two types of moral dilemma (loop dilemma and trolley dilemma) following three issues were examined: (1) Is interventional inertia caused by Kantian imperative? (2) Does power priming disinhibit interventional inertia and increase rational decision? (3) Are sense of responsibility and self-sacrifice attitude in moral dilemma situation caused by altruistic morality enhanced by power priming? Respondents conducted word searching task which asked to find power related words, then asked to imagine a situation in which they were in a powerful position. Next, they read scenarios which described the trolley dilemma or the loop dilemma and answered a series of questions concerning moral decision. As a result, interventional inertia was stronger in the loop dilemma than in the trolley dilemma. The number of decision to intervene was increased by power priming only when the participants were in the loop dilemma. And power priming enhanced the sense of responsibility and self-sacrifice tendency. The adaptive merit of disinhibition by power was discussed.

Keywords: Moral dilemma, power, intervention inertia, disinhibition, Kantian imperative